

# 習得の遅れている学生への支援

## — G30日本語における取り出し授業による試み —

鄭 聖美 永井 絢子

### 要 旨

筑波大学留学生センターでは、平成22年度より筑波大学のグローバル30所属の留学生に日本語科目、及び日本事情等科目を提供している。そのなかの、平成24年度1学期の日本語Ⅲというクラスには、クラス相当のレベルより習得の著しく遅れている学生が3人も在籍していた。そこで担当教師とTAが協働し、その3人に対する学習支援を行った。本稿では、その支援について報告する。まず、今回の支援が必要となった理由を、グローバル30の日本語科目のカリキュラムと支援対象者の日本語能力や要望という背景から説明する。次に、どのような支援が実施され、支援対象者の様子はどう変わったかを詳記する。最後に、今後に向けての反省点と示唆を考える。

【キーワード】 グローバル30 日本語科目 習得の遅れ 学習支援

## A Report on Support for Slow Learners of Japanese : a trial of supplementary lessons in the G30 program

JUNG Sungmi, NAGAI Ayako

【Abstract】 The International Student Center at the University of Tsukuba began a new course in Japanese and Japanese issues in 2010. In the first trimester of 2011, three remarkably slow learners attended a class called Japanese 3. They entered the class having not yet reached the level of the class. Therefore, the instructor and teaching assistant collaborated and supported them in effort to help them succeed in completing the class. In this report, we first explain why this support was necessary from the aspect of the curriculum of Global 30 Japanese, Japanese proficiency of the learners, and the needs of the learners. Then, we outline the support given and describe the learners' changes. Finally we make suggestions for the future.

【Keywords】 Global 30, Japanese course, slow learners, learning support

## 1. はじめに

筑波大学のグローバル30 (以下、G30) プログラムでは、筑波大学留学生センターを開設母体とする「グローバル30日本語・日本事情等科目」を設置し、平成22年度よりG30所属の留学生に日本語科目、及び日本事情等科目を提供している (ブッシュネル 2012)。すなわち、G30は、平成24年度の2学期に第3期生を受け入れた、開始して2年弱しか経っていないプログラムである。よって、まだ蓄積された経験やノウハウが少なく、実践中に浮上した様々な問題の改善を試み、試行錯誤してG30日本語科目の特徴に最適なカリキュラムとシラバスを探っている最中である。英語によるプログラムというG30の特徴上、日本国内にいるにもかかわらずクラス外では日本語でのコミュニケーションをほとんど持たない学生がいるが、G30日本語科目、特に初級クラスが抱えている問題の一つは、そのような一部の学生に、著しい習得の遅れが生じているということである。筆者の一人 (鄭) が担当しているG30日本語科目の「日本語Ⅲ」というクラスにおいても、平成24年度1学期にクラス相当のレベルより遥かに力の弱い学生が3人もおり、彼らに対する特別な学習支援が不可欠な状況であった。本稿では、その支援の報告を行う。

## 2. 支援の背景

### 2.1 G30日本語科目のカリキュラム

ブッシュネル (2012) によると、筑波大学のG30プログラムでは、日本語が「第1外国語」として位置づけられ、計4.5単位 (1.5単位×3科目) を取得しなければならない必修科目になっている。日本語科目には、「初級日本語」と「中・上級日本語」という大きな区分があり、初級日本語 (日本語Ⅰ～Ⅳ)<sup>1</sup>は1年生の固定時間割に組み込まれているため、学類授業のスケジュール上、実際の授業時間は週3回 (一学期におよそ30回) しかない。

下記の表1のように、G30日本語科目の現行体制では、一学期に1科目を履修して一学期毎に進級していくようになっている。また、入学時点で「日本語Ⅱ」以上の日本語力を持っていることが期待されている。8月 (2学期) に入学して日本語Ⅱに配置された場合、1年生の2学期に日本語Ⅱを履修し、1年生の3学期に日本語Ⅲの、2年生の1学期に日本語Ⅳの履修を終え、2年生の2学期からは中級日本語の受講が可能となる。もし、いずれかのクラスで不合格となって再受講すると、必修単位の取得は2年生の2学期以降に延ばされる。ところが、日本語科目は1年生の時間割にしか組み込まれていないため、2年生の2学期からは日本語の授業に出るのが難しくなる場合が多い。よって、必修の日本語単位は入学年度の1年間に取得しておくのが望ましい。

表 1 日本語科目の現行体制（平成24年現在）

8 月入学 →	一年次			
	第二学期		第三学期	
	初級	日本語Ⅰ 日本語Ⅱ 日本語Ⅲ 日本語Ⅳ	初級	日本語Ⅰ 日本語Ⅱ 日本語Ⅲ 日本語Ⅳ
	中・上級	日本語Ⅴ 日本語Ⅵ 日本語Ⅶ	中・上級	日本語Ⅴ 日本語Ⅵ 日本語Ⅶ
二年次				
第一学期				
初級	日本語Ⅰ 日本語Ⅱ 日本語Ⅲ 日本語Ⅳ			
中・上級	日本語Ⅴ 日本語Ⅵ 日本語Ⅶ			

（ブッシュネル 2012：39より一部修正）

しかし前述のように、G30カリキュラム上、日本語は第二言語ではなく外国語であり、週 3 回という少ない授業時間しか与えられていない。その上、一学期に一レベルというスピードになると、どうしても知識の詰め込みになることが多く、運用力まではなかなか身につかないのが現状である。特に、非漢字系学生にとっては、一学期に一レベルというスピードがより厳しく感じられるようで、なかには一つのレベルを何回もリピートするケースや、ぎりぎりの成績でクラスは上がるものの日本語の力は伸びないというケースも出ている。また、わずかではあるが、日本語能力の向上は全く顧みず、とにかく何とか必修単位だけ取れば良いというケースもある。

## 2.2 支援対象者（3 人）の日本語能力

今回の支援を受けた 3 人は全員非漢字系からの男子学生である。日本語Ⅰから履修を始め、平成24年度 1 学期に日本語Ⅲに進級してきた。日本語Ⅰでも日本語Ⅱでも担当教師は 3 人を含む一部の学生の、授業内容等が理解できない様子、及び定着の悪さを何度も報告した。

3 人の日本語Ⅲへの進級時点での日本語能力を把握するために、初日に『SFJ (Situational Functional Japanese)』の付録教材、「Grammar Check」（資料参照）の日本語Ⅰ（L1～L6）と日本語Ⅱ（L7～L12）の問題を解いてもらった。その結果、S1はL6まで、S2はL4まで50%以上クリアできた。S3はL1から50%のクリアに届かなかった。翌日には、教師と 1 対 1

でインタビューを行ったが、3人とも日本語による応答が全くできなかった。S1は聞き取れてはいるが、どう答えればいいのか分からない様子だった。S2とS3は聞き取れてもいない様子だった。そこで、テストでクリアできた問題を日本語で読み上げて意味を英語で説明させてみた。S1はたどたどしいながらも日本語で読み、意味を英語で説明することができた。S2はテストでクリアした問題でも日本語で読み上げられず、意味の説明もできないものがあった。S3は、平仮名一文字を読み上げるにも2～3秒ほどがかかり、日本語Ⅰの短い文でさえスムーズに読み上げることができなかった。意味を問うと、全く答えられなかった。以上のことから、日本語Ⅲへの進級時点での3人の日本語能力は、S1が日本語Ⅰの期末頃の力に、S2が日本語Ⅰの学期半ばの力に、S3が仮名導入の直後の力に相当すると見受けられた。

### 2.3 支援対象者からの要望

このように習得の著しい遅れが生じた場合、開設機関である筑波大学留学生センターでは、学生に本人の力に合うクラスの再受講を積極的に進めるのが基本方針である。しかしG30では、日本語科目の履修が卒業要件と関わるため、一度単位を取得した科目を再受講させるということは原則として不可能である。また、3人に意向を聞いたところ、3人とも日本語Ⅰと日本語Ⅱへの移動を拒否し、日本語Ⅲに残ることを強く希望した。一科目でも再受講すると1年間のうちに必修単位の取得ができなくなるため、どうしても当学期に日本語Ⅲを履修し、必修単位を取得したいというのが理由であった。そこで、日本語Ⅲを受講する以上は、日本語Ⅲのほかの学生と同様の内容を学び、同じ基準で評価されることを承知してもらった上で、G30日本語科目のコーディネーターと相談し、日本語Ⅲの受講を確定した。

### 3. 支援の計画

3人が日本語Ⅲの学習項目を消化し、日本語Ⅲの履修に成功するためには、特別な学習支援が必要であった。まずは日本語Ⅰと日本語Ⅱの復習が急務であり、日本語Ⅲの学習項目の理解と定着のためのサポートも不可欠であった。幸いG30日本語科目は週一コマ(75分)、TA (Teaching Assistant) のサポートが提供されるので、教師とTAが分担し、支援を行うことにした。

3人の希望が当学期に日本語Ⅲを履修することであること、当時点で3人が日本語Ⅲの学習項目を自力で予習するのはほぼ無理であること、当時点での3人に日本語Ⅲの学習項目を日本語で導入するのは困難であること、本授業の前後には3人がそろるのが難しく授業形式の支援は行えないこと、TAが提供できる時間は1週間一コマであることなどを考慮すると、一番効率の良いと考えられる分担が、下記の表2のようなものであった。すなわ

ち、(1) 日本語ⅠとⅡの文型と語彙の復習は、教師の管理と助言を得ながら、学生が自分の責任とペースで行う、(2) 日本語Ⅲの学習項目を導入し理解させるのは教師が英語で行う、(3) TAとの時間にはその理解した内容を口頭練習中心の復習にあてる。それによって、日本語Ⅲの学習項目の定着を図るとともに、日本語によるコミュニケーションのチャンスを与え、日本語への興味と日本語学習への動機付けにつなげる、という計画であった。

表 2 支援の計画

	日本語Ⅰ・Ⅱの復習	日本語Ⅲの理解	日本語Ⅲの定着
担当	教師	教師	TA
時間	本授業の前後の15分	本授業(週3コマ)	取り出し授業(週1コマ)
方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師による資料配布</li> <li>・自宅での自律学習</li> <li>・教師に報告し、チェックと助言をもらう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語による指導</li> <li>・グループ分けによるクラス運営</li> <li>・理解を徹底させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語による指導</li> <li>・3人のみを対象</li> <li>・理解した内容を口頭練習で復習</li> </ul>

#### 4. 支援の実施

##### 4.1 日本語Ⅰ・Ⅱの復習の支援と様子

3人の学習支援は、当学期の第2週目から開始され、学期の最終週である第11週目までの10週間にわたって実施された。学生によって本授業の前後に時間が取れる日が異なるため、教師が授業前後の15分間クラスに待機し、個人的に対応するという形とした。支援の第1週目に日本語Ⅰの語彙リストと文型練習の問題を渡し、毎週進捗状況を報告して定着をチェックしてもらうように指示した。しかし、3人とも学類のタイトなスケジュールに追われ、なかなか進まなかった。そこで、支援の第2週目から文型の復習の仕方を変え、『わくわく文法リスニング99』の空欄入りのスクリプトを用い、授業の前後に教師の前で音源を聞きながら穴埋めをさせた後、スムーズに読み上げる練習をさせた。語彙の復習は引き続き自律学習に任せ、一課が終わる度にチェック・テストを受けさせた。支援の最終週までに、S1はL10までの復習ができたが、S2はL6まで、S3はL3までしか進めなかった。

##### 4.2 本授業での支援と様子

当学期の日本語Ⅲの受講者は、全員G30日本語科目の日本語ⅠとⅡを経て日本語Ⅲに進級したG30生であったが、支援対象者3人はほかの学生たちとの日本語能力の差が非常に大きく、同じグループでの活動ができなかった。新しい文型の導入は、理解を正確なものにするため、クラス全体に対して英語で説明したが、ほかの活動においては、まずクラス全体に対して日本語で指導し、支援対象者3人には英語による二度目の指導を行った。

ほかの学生たちが新しい文型の理解とSD (Structure Drills) を終え、文型の口頭練習を行っていても、支援対象者3人はまだ当該学習項目に対する基本的な理解に達しようとするところであった。そこで、ほかの学生たちには文型練習型の発展課題を与え、その間に支援対象者3人の理解をサポートした。それでも、授業時間内に新しい文型を理解できない場合があった。

本授業での3人への支援は主眼がSDの理解におかれていたため、本授業での3人の様子も主にSDの理解について述べたい。

S1は、学期の後半になるほど、少し理解が早くなり、授業時間内に理解できることが多くなった。日本語ⅠとⅡの復習内容が日本語Ⅲの学習項目とつながり、日本語Ⅲの内容を理解する認知的負担が多少減少したからだと思われる。S1は日々質問が増加し、段々自発的に日本語で発言しようとする様子が見られた。新しい文型が使われる状況を自力で理解しようと必死に頑張る様子も見られた。

S2は、時間内に理解できることがほとんどなかった。S2が時間内に理解できない主な原因は語彙力の弱さであった。日本語ⅠとⅡの基礎語彙、特に基本動詞が分からないため、文の意味が取れない場合が多かった。そのため、常に機械的にキーワードのみを入れ替える練習となり、パターンを変えると失敗した。学期の前半には自分から発言したり、質問したりして意欲を見せていたが、中間テスト期間を起点に何故か急に落ち込んでしまった。学期の後半に入ると欠席や宿題未提出も現れ、意欲が戻らないまま期末を迎えた。繰り返した復習の成果が徐々に現れ、少しずつ伸びが見えてきたところでの急変だった。

S3は、授業時間に自発的に発言することがなく、受け答えをすることも全くなかった。常に資料を見ていて懸命にノートを取っていた。授業後にも質問することがほとんどないため、教師が確認してみると何も答えられなかった。その一方で、誰かの助けを得ているのか、宿題の答えは完璧だった。

#### 4.3 取り出し授業での支援と様子

(1) 支援の第1週目：教師から、「1週間で習った『初級日本語J300』のSDを復習させ、なるべく口頭練習を繰り返す」という指示を受け、TAが取り出し授業を開始した。L13 SD1-3、5-7 (授受動詞等) を始める前に、まず「日本語でたくさん話す」ことを学生に指示した。3人は「て形」をよく間違え、PC (Picture Card) を見て文を言うこともできなかった。自由な発話を促すと、S1とS2は少し話し、特にS2は自分から話した。しかしS3は自分からは全く話さず、自己紹介でも専門が言えない等の問題があった。

(2) 支援の第2週目：L14 SD1-6 (可能形等) の練習で、学生はキーワードを見て機械的に可能形に変換したり、文を作ったりはできるが、意味は分かっていなかった。例えば、実はできないのに「日本語でeメールが書けます」などと答えた。

- (3) 支援の第3週目：S3が欠席だったが、前回S1からリクエストがあった「ない形」の復習を行ったところ、形の確認ができてだけで運用力をつける練習には至らなかった。その際、基本動詞の混同や丸暗記している様子、動詞グループの理解不足が観察された。例えば、「よむ」「のむ」を混同したり、「だします」をⅢグループに入れたり、「ます形」が言えても意味が言えなかったりした。また、L14 SD7-9（授受補助動詞）では、S1でも状況・場面が全く分かっていないことがあった。教師はTAに、本授業と取り出し授業で間違ったり、意味が分からなかったりするところが重なり、支援がクラス外での自習を促していないという反省を伝え、支援がより自律学習への足場となるべきだとコメントした。また動詞PCによる復習を提案した。
- (4) 支援の第4週目：L15 SD1-2（～てみる等）を進めたが、動詞Ⅰグループの「て形」は正しく言えないものが多く、Ⅱグループも時々間違えていた。前回と同じ動詞を間違える様子も見られた。SD確認に時間がかかり、動詞PCを活用する時間がなかなか作れなかった。教師とTAは、やはり間違いや分からない語彙が重なっており、語彙の定着が急務であること、本授業と取り出し授業で連携して繰り返し、粘り強く定着を目指すことを確認した。
- (5) 支援の第5週目：L15 SD4-7（命令形、尊敬語等）を練習したが、学生は毎回同じ動詞を忘れており、TAがヒントを出しても、全然思い出さないものもあった。TAの相談を受けた教師は、まだインプットが足りないことが考えられ、クラス外でもできるだけ多く日本語に接するように促すべきだとコメントした。
- (6) 支援の第6週目：前回の取り出し授業の復習をしたところ、前回の内容はほとんど忘れていた。また、L16 SD1-4（意向形等）では、機械的に答えられても、少し自由な質問をすると答えられなくなる様子が観察された。また、S2の発音を直そうと非明示的に修正を試みたが、直らなかった。教師はTAに、学期半ばに入って学生がゆるんでおり、引き締める必要があることと、取り出し授業では口頭練習を行うという当初の意図を改めて伝えた。
- (7) 支援の第7週目：S2は本授業を欠席して取り出し授業に来た。L16 SD4-9（名詞修飾等）のSDを少し変え自由度を上げた質問をすると、S2とS1はうれしそうな様子を見せたが、S3は質問の意味も理解していなかった。
- (8) 支援の第8週目：S3が欠席し、S1とS2のみでの授業となったが、SDの確認（L17 SD1-4、受身形等）にはいつものように時間がかからなかった。教師からTAへのコメントは、やっと当初の狙い通り（口頭練習中心）になってきたことであった。
- (9) 支援の第9週目：L17 SD5-10（受身等）でPCを持たせて文を言わせたが、自力で言えたのはS1のみであり、S3は全く言えず、機械的な受け答えから抜け出せていない様子が見られた。また、S3が答えようとする間、S1は暇になることが多かった。教師からTA

へのアドバイスは、S1には動詞PCの確認などほかの活動をさせることであった。

(10) 支援の第10週目：L18 SD1-3、6-7 (謙譲語等) であったが、S3はカタカナが全く読めず、当てずっぽうで読む様子が観察された。最終回であったが、答えの書きとめに熱心で、資料に頼らず自力で日本語の文を産出しようとはしなかった。

## 5. 支援の結果

10週間の支援の結果、力が一番伸びたのはS1である。支援の開始時点では日本語Ⅰの期末頃の力を持っていたが、支援の終了時点では日本語Ⅲの枠に収まる力となった。第一の改善点は、宿題以外にもクラス外で自習する習慣がついたことである。日本語Ⅰ・Ⅱの復習を支援したことによるものと思われる。その結果、日本語Ⅱの形容詞と動詞などの基本語彙がしっかり定着できた。しかし、日本語Ⅲの形容詞と動詞はすぐ思い出せず、文の産出にはまだ時間がかかった。もう一つの改善点は、日本語らしい文を自力で自発的に話せるようになったことである。学期初めには語彙力の不足はもちろん、助詞抜きで語順までも間違って意味の取れない文を話したり、英語らしき文型に日本語らしき語彙を入れて話したりしていたが、学期末にはまだ助詞のミスがあったり適当な単語が浮かべず助けを求めたりする時はあるものの、自力でゆっくりと日本語らしい文を話すようになった。取り出し授業で繰り返した口頭練習の効果だと考えられる。しかし、自由度の高い質問や予想外の質問にはまだ反応できないので、運用力までは至っていないと思われる。一番注目し値する改善点は、文の意味と状況を考えてしようとしたようになったことである。例えば、学期初めには「夜コーヒーを飲むと、(寝る)」と問うと、当分考えた後「寝られます」としか答えられなかったが、学期末には「食堂、昼ごはん、食べる、いく」というキーワードを与えると、「食堂へ昼ごはんを食べにいく」と「食堂で昼ごはんを食べていく」という2つの文を作り、その状況の違いまで説明できるようになった。本授業で、機械的にキーワードだけを入れ替えるのではなく、常に文の意味と状況を考えて答えを探るように指導し続けたのが功を奏したのではないかと思う。

一番伸びなかったのは、S3である。支援の開始時点で平仮名の読み上げに躓いていたS3は、支援の終了時点になっても平仮名がスムーズに読めなかった。多少の改善は見られた。学期初めには「男の子」の振り仮名をみて「お・こ・と・こ・と」と読んでいたが、学期末には「お・と・こ・の・こ」のように読めるようにはなった。最後まで「おとこ・の・こ」とは読めなかった。すなわち、単語レベルでの読み上げではなく、仮名一字一字の読み上げに留まっていた。特に、片仮名は学期が終わるまで読めず、形容詞や動詞を練習させた直後に選択問題を出すと「チョコレートは早い」、「プレゼントを書く」というように片仮名語の入った問いにはいつも失敗をしていた。本人も学期を通して何度も、仮名が覚えられない、単語を覚えてもすぐ忘れてしまうと訴えていたように、文字が妨げ



となって単語レベルでさまよっており、文のレベルまでは至らない状態であった。よって、日本語Ⅲの学習項目を学ぶのは認知的な負担が大きく、日本語Ⅲの語彙と文型は全く理解できていなかった。

S2は、学期初めには勢いよく吸収していたが、何らかの原因で後半からその勢いが消え、当初の教師の予測よりは伸びなかった。支援の開始時点では日本語Ⅰの学期半ば頃の力を持っていたが、支援の終了時点では日本語Ⅱの学期初め頃の力となった。支援によって改善された点としては、「さ」を右左の逆向きに書いていたが学期末にはきれいな「さ」とかけるようになったこと、いつも「は」と「ほ」を混同して「日本語」を「にはんご」と、「本」を「はん」と書いていたのが学期末にはきちんと「にほんご」と「ほん」と書けるようになったこと、まだ「よむ」と「のむ」の混同はあるが日本語Ⅱの基本動詞が聞いて分かるようになったこと、未知語の意味が与えられると文の意味が分かるようになったことなどが挙げられる。ただし、仮名と日本語Ⅰの学習項目もまだ不安定で、伸びが見られたと言えるのは、選択式問題がクリアできるような知識が増えただけであり、自力で日本語の文が産出できる力まではならなかった。

## 6. 反省と今後に向けての示唆

### 6.1 G30日本語科目の要改善点

今回の支援は、学習の著しい遅れが見られる学生が進級してきたために実施された。そこで、進級をより慎重にするための対策が求められる。すなわち、出席と宿題、発表などを頑張れば何とか合格点が取れるということのないように成績評価基準を改善し、日本語能力の向上を目指した学習になるようにすべきである。また、当学期の日本語Ⅲの受講者は入学してから日本語学習を始め、英語使用の多い日本語の授業を受けてきたため、日本語Ⅲの初日には日本語のみによる簡単な教室用語も理解できなかった。しかし、教室で英語使用を最小限に抑え、日本語による指示と説明を繰り返し行えば、「て形」、「ない形」、助数詞、基本語彙などの基礎の定着率は向上するはずである。よって、G30が英語で教えるプログラムではあっても、日本語科目だけは授業中の英語使用に制限をおくべきだと考えられる。今回の支援から浮上した、この二つの問題点については、既にG30日本語チームの中でその対策案が議論され、第3期生を対象としたカリキュラムに反映されている。

なお、今回の支援対象者からの、G30日本語科目はペースが速いという声も、今後に向けて参考にすべきである。彼らは、「日本語の完全な未習者として入学した非漢字系のG30生にとっては、一学期に学ぶ内容が多すぎて知識の詰め込みになりがちであり、日本語の産出力と運用力まではなかなか気が回らない」ということを如実に見せてくれた。そこでG30日本語チームでは、一学期に扱う学習項目の量を多少減らし、与えられた文脈の中で、自分の知っている語彙と文型を用いて反応するというタスク活動を取り入れ、産出力や運

用力を育む試みを行っている。

## 6.2 教師からの反省と今後に向けて

今回の支援では、1人に関しては教える側と学生が共に満足できるほどの伸びが見えたが、2人に関しては双方が満足できる結果が得られなかった。その1人と2人の差は何であろうか。

まずは、学期初めの日本語能力の違いが挙げられる。つまり、学習の遅れている程度が違うため、追いつかなければならない量も、認知的な負担も異なったのが、第一の原因であろう。その差を反映させずに、支援対象者の希望のみに従い、一斉に日本語Ⅲの項目を導入したのが無理だったと反省する。支援対象者のそれぞれの現レベルに合わせた項目を練習させるべきであった。

また、学生の個性や学習スタイルの違いも主な原因の一つであろう。すなわち、結果が得られなかった2人には、その個性や学習スタイルに適した支援が提供されていなかったからであると思う。S2は短気で伸びがこまめに確認できないとすぐがっかりする。S3は何故か文字媒介による言語学習に非常に抵抗があり、常に読字に多くの気が取られる。ところが、教える側はコースの後半に入るまで2人のこのような個性と学習スタイルが把握できず、結局最後まで、一律的にクラス内で紙資料や音源による指導を行うことしかできなかった。より早い時点で把握できたなら、日本語への興味と動機づけにつながる課題(クラス外の課題遂行、日本語接触場面でのボランティア活動、日本語メディアの視聴報告など)を与え、自律学習の足場としての支援ができたかもしれない。

特に、S1の成果に最も貢献したのは彼自身の自律学習であったことを考えると、S2とS3への支援も長い目で自律学習へ導くものであるべきだったと反省する。学期の半ばから日本語ⅠとⅡの復習を通して自律学習の習慣がついたS1が、後半に入ってから本授業でも取り出し授業でも刮目に値する伸びを見せたことは、今後このような支援を計画する教師たちに示唆するものが多いと思われる。

## 6.3 TAからの反省と今後に向けて

まず、G30生に接するのが初めてだったため、G30日本語科目の目的自体やG30生のビリーフに対する理解が不足していたのではないと思う。少人数という学習機会も生かせず、各人のレベルや個性、学習スタイルへの対応が十分にできなかった。

具体的には、S1は授業を重ねるにつれ「分かりません」と言う回数が減って、他の2人を手助けすることが多くなり、時には少し手持無沙汰にしている様子も見られるようになった。理解度が上がり、2人との差が開いたことが考えられたが、少人数の利点を生かして、質問の難易度を上げる等の工夫をもっとすべきであったと反省している。

S2は母音の発音が不自然であったため何度か訂正を試みたが、最後まで直せず、化石化していることが考えられた。発音の問題はSDの語彙・文法ほど重視していなかったが、例えば「映画」を/eigo/と言っていたのは語彙の問題ではなく発音の問題であったとも考えられる。発音の問題が解決されれば大きな自信につながった可能性もあり、明示的な修正も試みるべきであった。

一番残念なのは、S3には日本語を使おうとする姿勢を持たせられなかった点である。自分から発したのは「ありがとうございました」が数回、「分かりました」が一回だけであった。応答詞の「はい」もほとんど使わず、“OK”と言うことが多かった。一方で、S3は書きとめることに熱心であり、ジェスチャー等で板書を要求することもしばしばあった。正確さを重視している様子であり、自分から発言しなかった理由も、間違いを恐れたからかもしれない。取り出し授業の意義、受動的に参加するのではなく主体的に学習することの大切さを、最初にもっとはっきり伝えると同時に、リラックスして話せる雰囲気作りを心がけるべきであった。また、「分かりました」と言った際に褒めていけば、日本語で話すことを自然に促せたと反省している。

教室での学習態度に3人とも問題はなかったが、特にS2とS3は、教室外での自律学習につながらず、語彙力もつかないままであった。S2とS3にとっては、与えられたキーワードで機械的に文を作っていただけで、運用に全くつながらなかったのではないかと思う。SDそのものではなく、少し変えた別の練習やタスクで運用力がつけられるようにすれば、これらの状況は違っていただかもしれない。

今回いい結果が得られなかったのには、もちろん学生・教える側の問題もあると考えられるが、もしG30生のビリーフ調査があり、学習動機や学習スタイルが予め分かっていたら、教師とTAが相談して早く対応できた可能性がある。

## 7. おわりに

まとめに代えて、下記の3点についてお断りをして終わりたい。

まず、本報告は、筑波大学のG30プログラム、または、G30日本語科目としてのものではない。あくまでも、平成24年度1学期のG30日本語科目の日本語Ⅲというクラスで生じた問題点とその改善の努力として捉えてもらいたい。

次に、本稿の支援対象者がG30生のステレオ・タイプとなるのを極力避けたい。日本語学習に関するG30生の動機・意欲・背景・能力には幅広いばらつきがあることを強調しておきたい。

最後に、本稿は決して成功例の報告ではない。限られた条件の中で教える側のできる最善の策を試した、試行錯誤の一例である。今後、本稿で述べるような学生を指導する教師に、一つの前例として何か示唆できるものがあればという願いから、記録に残しておきたい。

## 謝辞

今回の支援と報告書の作成にあたり、ご指導とご助言下さったブッシュネル先生と、データ使用と報告書の作成を承諾して下さった支援対象者3名に、この場を借りてお礼を申し上げます。

## 注

1. 日本語Ⅰは留学生センター日本語補講のJ100 (Introductory) に、日本語ⅡはJ200 (Beginners : low) に、日本語ⅢはJ300 (Beginners : mid) に、日本語ⅣはJ400 (Beginners : adv) に相当するものである。

## 参考文献

- ブッシュネル ケード (2012) 「英語で教える日本語・日本事情—グローバル30における日本語・日本事情コースについて—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』27号
- 筑波ランゲージグループ (1995) 『Situational Functional Japanese, Vol.1-3 (第2版)』 凡人社
- 筑波ランゲージグループ (2012) 『初級日本語Drill, J100-400』 筑波大学留学生センター
- 小林典子・フォード丹羽順子・高橋純子・梅田泉・三宅和子 (1995) 『わくわく文法リスニング99』 凡人社

資料

『Situational Functional Japanese』の付録教材「Grammar Check」の例

Grammar Check1

Read the Grammar Notes of Lesson 1 and check how well you have understood it.

Choose the correct statement.

- 1           A: 専門は何ですか。  
              <sub>せんもん   なん</sub>
- B: a) はい、そうです。  
                  b) 留学生です。  
                      <sub>りゅうがくせい</sub>  
                  c) 医学です。  
                      <sub>いがく</sub>
- 2           A: 大学はどちらですか。  
              <sub>だいがく</sub>
- B: a) はい、松見大学です。  
                      <sub>まつみ   だいがく</sub>  
                  b) 松見大学です。  
                  c) いいえ、松見大学じゃありません。
- 3           A: ジムさんはイギリスの留学生ですか。  
  <sub>りゅうがくせい</sub>
- B: a) ええ、そうじゃありません。  
                  b) いいえ、そうじゃありません。  
                  c) ええ、留学生です。

— 下略 —